例 会 要 旨

2011年1月24日
於　筑波大学筑波キャンパス

東南アジア大陸部の統計未整備地域におけるフィールドワーク調査

横山　智（名古屋大学）

博士論文で対象とした統計・地図未整備地域におけるフィールドワークの事例と，異分野の研究者との共同研究を通して意識した人文地理学の特徴と可能性について報告した。

ラオスは，国が管理する公式な統計が不正確であり，大縮尺の地図も作製していない。この問題を克服するため，統計に関しては悉皆調査を行い，地図に関しては歩測による測量およびGPS機を用いた観測によってベースマップを作製した。ベースマップから様々な主題図を描くことができ，主題図の作製および解釈を通してスケール概念の重要性に気が付いた。

就職後は異分野の研究者と共同研究を行う機会が増え，人文地理学の特徴と可能性を意識するきっかけとなった。人文地理学の長所は，地域を機能地域ととらえて地域間ネットワークを解明することができる点，地図によって説得力のある説明ができる点，総合的な見方ができる点，地域の現象を空間スケールでとらえることができる点である。一方で短所は，現状の記述に終始しがちである点，研究成果を地域に還元する視点が弱い点，地域研究の拠点機関に地理学者がおらず地理学の研究成果が参照されにくい点である。

地理学特有の総合的な見方は，近年の分野の細分化によって失われつつある。地理学のユニークさを維持するためにも，自然地理を含めた幅広い知識を身につけ，よりエリア・スペシフィックな見方ができるようになる必要がある。また，ファクト・ファインディングで終わらず，現状の記述を理論的に説明する必要がある。こうした努力の積み重ねが，さらなる地理学の強みに結びつくのではないだろうか。

2011年2月23日
於　筑波大学筑波キャンパス

地球をフィールドワークする
ーブタの遊牧から考えるー

池谷和信（国立民族学博物館）

地理学は自然とヒトのつながり方をテーマとしており，地球を捉えるために生まれた学問である。地理学最大の魅力はフィールドワークである。緻密なフィールドワークによって，定説を覆すことがある。分かっていることを確認するための作業はフィールドワークではない。演者は，これまで存在が知られていなかったブタの遊牧がバングラデシュに現存していることを突き止め，5年間に渡って研究を続けてきた。バングラデシュにはブタの遊牧に関する統計すら作成されていなかったが，ブタの遊牧に関して，イスラ

ム教徒とヒンドゥー教徒との関係，ブタ飼い（牧夫）同士の社会関係，ブタ飼いの放牧の範囲とテリトリー，牧夫による種ブタとの関わり方，掛け声を含むブタの飼い方，ブタの餌を確保する方法，野生サトイモの存在の重要性，エサ場（コモンズ）の利用方法，年間の移動ルート，ブタの泳続距離など，バングラデシュでブタの遊牧が成り立つ理由とそのメカニズムを解明した。動物を操る技術は，人間の文明（農耕と牧畜）の一つであり，解明する意味は大きい。今後は，以下の3点の課題に取り組む。①舎飼い，放し飼い，遊牧の3つのブタ飼い方と地域的差異を，文化と民族移動を重ね合わせることによって重層的に解明すること。②肥育するブタ飼いと牧夫など，ブタを介したネットワークを面的に把握すること。③世界中のどこの地域でブタの遊牧が行われているかを把握することである。

あるテーマで現地に入ったとき，そこで面白いと感じるものにはいくつかの種類がある。面白いと感じたものが学会で求められるテーマかどうかを見極めることは，自分のプロフェッショナル科学が何かを意識した上での自己点検である。既存の研究を踏まえた上で，現地で見つけた面白いテーマをフィールドワークによって解明することが，地理学の醍醐味ではないだろうか。その際，先行研究の中に自身の研究をマクロに位置づけることが重要である。

2011年3月10日
於　首都大学東京秋葉原キャンパス

アメリカ合衆国における地図学・GIS教育の変遷
－20世紀後半のワシントン大学を例に－

鈴木厚志（立正大学）

本報告はアメリカ合衆国における地図学・GIS教育の変遷を整理し，ワシントン大学地理学教室を事例としたGIS教育の定着過程とその問題点を検討したものである。報告した内容は次の4点である。

1. 20世紀アメリカ合衆国の地図学教育
2. 教科書にみる地図学教育の変遷
3. ワシントン大学地理学教室の地図学教育（1950年代～1980年代中頃）
4. ワシントン大学地理学教室のGIS教育（1980年代後半～現在）

アメリカ合衆国の地図学教育がコアプログラムを持ち，体系的な教育が実施されるのは第二次世界大戦後であり，1980年代までは地図のデザインや複製等の伝達的側面を強調し行われてきた。試験的ではあるものの，1970年代前半にはコンピュータマッピングを導入した授業も一部行われている。GISが本格的に導入され，地図学教育がGIS教育と融合されるのは1980年代後半からである。

ワシントン大学を事例としたGIS教育の定着過程に着目すると，当時若手の専任教員であったNyergesとChrismanは地理的地図学（Geographic Cartography）の学習課程を基盤とし，かつ地図学とGIS関連科目で扱う内容と知識基準を明確にしてカリキュラム編成を行った。結果として，手作業を伴う地図学の授業は姿を消し，最近では，社会におけるGISの位置付けを説く授業や，地域的事象を地図化することの意味を強調した実習付き授業が学部と大学院にそれぞれ配置され，連続的なカリキュラム編成となっている。